



ビュフォンの博物誌

杉山 武 敏

普通なら存在しない筈のところが存在している希少本の一つをここにご紹介したい。

1957年に医学部を卒業後、病理学教室に入った時に、病理本館2階に立派な図書室があって、前世紀からのVirchow's Archivなどの貴重な医学や病理学に関する専門誌が天井まで所狭ましと並んでいた。この中に医学と関係のない一群の古書があった。その筆頭がここに紹介するビュフォンの博物誌27冊である。書籍の多くは私の他大学遍歴の30年の間に新設の医学図書館と医学部付属解剖センターに収納され、最後の一部が最近まで残っていた。京都大学に帰任後、この博物誌は元の場所にはなく移動先にも見つからなかった。ある時、清掃中に3階の廃棄予定のごみに混じって紙袋に入れて放置されてあるのを発見した。以来、この博物誌は貴重な歴史図書として出入りの自由な図書室から私の教授室に移して身近に保管していた。

これが、ビュフォン研究家の人間・環境学研究科の高橋義人氏の知るところとなり、その紹介でNHKがこの名著の存在を放映した時も、医学部ではビュフォンの名さえ知らない現実があった。そこで、私自身の興味による調査の後、中央図書館に移管することが必要と考え、その方向で手続きが進みかけたが多忙のために手続

きが延びていた。最近、病理学教室の図書室が整理されたのを機に更なる受難を避けるべく、本書の永久保存を進めるために、この希少本の内容をここに紹介し、この種の貴重な書籍の保存と公開について提言を待ちたい。

ビュフォンCompte Georges-Louis Leclerc de Buffon(1707-88)はフランスの博物学者で知られる。物理学を収め、英国にわたりニュートンの影響も受け、1739年にパリの王立植物園長として登用され、以来生涯園長をつとめた。この間に1749年から『博物誌、Histoire naturelle, generale et particuliere』を1767年までかけて著した。ビュフォンの生きた時代はルイ14世(1638-1715)のブルボン王朝全盛時代から王朝終焉のルイ16世(1754-93)の時代にかけてであり、合理主義、啓蒙主義、革命の波が怒濤のように押し寄せる時代であった。『博物誌』を著すにふさわしい時代であったし、また本書の世に与えた文化的影響の故にビュフォンの名も忘れられない訳である。

『博物誌』初版本44巻は1749年から67年にわたり出版された。最近、我が国でも荒俣 宏監修、ペーカー・直美訳の『ビュフォンの博物誌』が刊行されたことはよく知られている。これは本文の部分訳と1123の図版を含み、我が国で初

めて『ビュフォンの博物誌』を紹介する手近かな出版物として画期的なものであった。荒俣宏監修の『ビュフォンの博物誌』は、しかしながら、129巻に及ぶ1798-1808年に発刊されたSonsoni版（Sonsonによる編集）にもとづくもので、ビュフォン没後10-20年の出版である。

これに対して、本学所蔵のものは27冊54巻からなっており、1785-91年にAux Deux-Ponts, chez Sanson et Compagnieから出版されたもので、次の理由から『ビュフォンの博物誌』の初版本の姿をよく伝えと考えられる。まず、本書はビュフォンの死亡3年前に出版が始まっており、ビュフォンの賛辞と伝記の抜粋が末尾に書かれている最終の27冊目を除いて生前に出版され、ビュフォン自身が企画監修したと考えられる。各巻末に補追記事があることを考えれば、初版本に規模が極めて近く、老熟期のビュフォン自身による『博物誌』の最も完成した姿を示すものと考えられる。一方、詳しく比較するとSonsoni版では図がすべて描き直されている。背景の樹木、葉、岩、構図までが変えられていて似てはいるが同一のものは一つもない。本書では幾種類かを集合で描かれているのが、Sonsoni版では分類上の無理が出来たためか種ごとに描き分けられている。また、図の質も本学の方が精密で色彩が美しい。着色は、1枚1枚毛筆で描かれ、保存状態もよく、輝くようである。Sonsoni版では多くの新しい動物の図が加えられ、ことに哺乳類が大幅に増え、爬虫類、両生類、魚類、甲殻類、昆虫、植物などが新しい巻として追加されている。Sonsoni版はビュフォンの遺志を受け継いで、時代の進歩を組み入れながら新しい図版を加え、時代の要望を満たすために大改版を行ったと考えられる。本文についての詳細な比較はしていないが、内容の追加や改定がみられる。

Britannicaの記述では、彼は生前50巻のうちで36巻を発刊したが、最初の15巻は1749-1767年に、最も注目されたÉpoques de la nature (1778)を含む次の7巻は1774-89年に、美しい鳥の

部分9巻は1770-83に、鉱物の5巻は1783-88に、最後の魚類、爬虫類、頭足類、を含む8巻はビュフォンの死後ラセピド Lacépèdeにより発刊されたという。以上から、本学所蔵のものは、『ビュフォンの博物誌』の初版本ではないが初版本をよく伝え、ビュフォン生前の意図の入った再版本であると考えられる。

疾病の原因を研究する医学部の病理学教室になぜこのような場違いな書籍が配備されたか。その謎について若干考察を試みたい。病理学図書室所蔵のものは、昭和3年11月30日付けの京都帝国大学図書館の朱印がついており、図書番号394196として登録され、医学部教室図書室の分類番号は31、書籍番号は45(1-27)である。病理学教室の建物は医学部の初期の建築と同様、明治33-34年の創立期に山本治兵衛の設計で建てられた。大正15年、当時の藤浪鑑教授時代に用務員の放火で病理学教室の建物の主要部分が貴重な研究資料とともに焼け落ちた。その後、現在の病理本館が設計され、昭和5年に竣工した。本書の登録された昭和3年11月は焼失した資料を再建予算で急いで収集した時期と考えられる。病理学教室の再建は後継者、清野謙次教授によってなされた。当時、予算申請に当たって清野謙次教授は予算金額の末尾に全項目0を一つ書き加えて申請、文部省はそのまま予算を執行したために予算が余り、医学部全講座に備品を買い与えたと伝えられている。清野謙次は病理学のみならず、考古学や人類学、民俗学にも興味尽きない人物で、日本人類の起源を全国規模の貝塚の発掘で追求した人で、民俗学、考古学、地誌学、女性学など広範な領域の書物を買集め、我々も、これらの本を見た記憶がある。『博物学』もこの時期に書籍輸入商から購入したものと考えられる。扉にBesthoren Nr1037-1062とあるのは、前の持ち主の図書番号であろう。また、27冊目の後ろ扉に(27) 120.00とあるのはセット価格であろう。

この『ビュフォンの博物学』がダウイン以前の『種』の考え、フランス革命前後の啓蒙思想、

科学思想を知るうえで貴重であり、何よりもこのような名著がわが図書館に存在し、図書館や博物館などで歴史資料として展示できることは極めて幸せなことである。今後の専門家による

詳細な調査と活用を期待したい。

平成13年1月23日記す。

滋賀県立成人病センタ - 研究所長(元京都大学教授)

(すぎやま たけとし)



図1. 第1巻の扉。1785年刊とある。本のサイズは10.0×16.5×5.0-6.0cm。

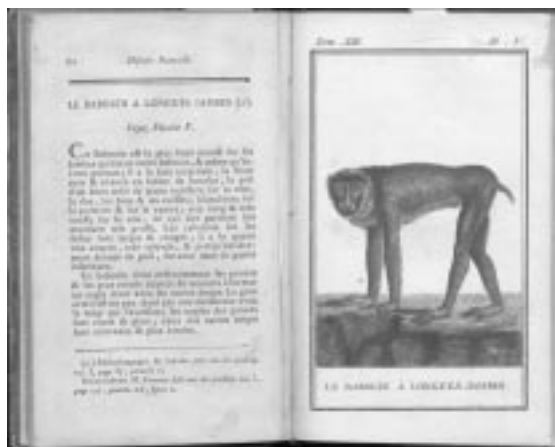


図2. 第27冊の四足獣13巻P62のヒヒ。



お知らせ

企画展『近世の京都図と世界図』

大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図

開催期間：6月1日(金)～6月30日(土)月・火曜休館

開催時間：午前9時30分～午後4時30分
(入場は4時まで)

会場：京都大学総合博物館(2階)展示室

記念講演会 『近世京都図の特性』

講師▶金田章裕氏(京都大学大学院文学研究科教授)
日時▶平成13年6月12日(火) 午後1時30分～3時
場所▶京都大学附属図書館(3階)AVホール(入場無料)

本展示会は、例年秋に開催しています公開展示会を、今年は京都大学総合博物館開館記念協賛企画展として、昨年度附属図書館が寄贈をうけた、大塚京都図コレクションならびに宮崎市定氏旧蔵地図の中から、あわせて80余点を展示します。



大塚京都図コレクションは、大塚隆氏が長年にわたって蒐集された近世刊行の京都古地図の一大コレクションです。居ながらにして近世京都の市街と洛外の名所に遊ぶことができますと同時に、墨刷りから色刷りへ、木版から銅版へと印刷技術の歴史をもたどることができるものです。

一方、宮崎市定氏旧蔵地図は、故宮崎市定名誉教授が在外研究員としてパリ滞在中に蒐集された西洋古版地図及び地図帳等で、しだいに精度を増していく世界図によって、ヨーロッパにおける地理的な知識の増大と世界観の変化をみることができます。